

# 無形文化遺産の謎

——ウラはあっても「おもてなし」

飯田 卓いいた たく  
民博 先端人類科学研究部

## 文化遺産のわかりにくさ

これまで誰も見向きもしなかったようなものでも、「文化遺産」といふだけで、マスメディアがござって話題にとりあげられるようになった。わたしは、それを喜ばしいと思う者だ。あたり前のように存在すると思ってい

たことからの価値を、あらためて考えなおす機会が増えたと思

う。文化遺産がある。文化遺産という語は、国際機関お墨つきという高貴なオーラを帯びながら、「うけ継いでいへばきもの」という単純素朴な意味ももっている。こうした二面性が、文化遺産ブームのひき金になったのだと、わたしはみている。



富士山は、2013年に「富士山——信仰の対象と芸術の源泉」という名称で世界文化遺産に登録された

つかからだ。



大天守閣保存修理中の姫路城。城の線画が描かれた素屋根に覆われている。1993年世界遺産に登録（2013年6月撮影）

文化遺産ブームにさきがけて知られるようになったユネスコの世界遺産は、もともと、そんな「いい加減な」ものではなかった。世界遺産は、専門家が厳密に審査し、顕著な普遍的価値を証明したもので、その称号は一流だ。その世界遺産のカテゴリーのひとつ

文化遺産ブームにさきがけて知られるようになったユネスコの世界遺産は、もともと、そんな「いい加減な」ものではなかった。世界遺産は、専門家が厳密に審査し、顕著な普遍的価値を証明したもので、その称号は一流だ。その世界遺産のカテゴリーのひとつ

しょうというのが、マスメディアをまきこんだ文化遺産ブームの本質だ。このことは、B級グルメブームについてもいえる。

## 普遍的な価値

世界遺産のように公認されたものと、現時点でマイナーなものと一緒に文化遺産とよばれるため、事情をよく知らない

人は、しばしば戸惑ってしまふ。とりわけややこしいのが、昨年に和食を仲間入りさせた「無形文化遺産」というやつだ。これは、ユネスコの国際条約にもとづいて、批准国の代表が審査して与えた称号で、世界遺産と同じくらしいの重みをもつ。

無形文化遺産の決定的なちがいがある。

世界遺産は「顕著な普遍的価値」、つまり、誰もがすごいと認められるような性格をもつことを条件とする。そして、登録審査の過程でも、この条件にかなうかどうか真剣に討議される。これに対して無形文化遺産の場合、申請国が書類を出してしまえば、あとはその価値の高さや妥当性が議論されることはない。極端に言えば、一家族の習慣や一企業の行事であっても、日本代表の事務局にねじ込んで納得させれば、国際会議にかけて無形文化遺産の称号を得ることができ



マダガスカル民族、ザフィマニリの木彫知識。2003年に初期登録され、現在は無形文化遺産

維持しているというちがいはある（たとえば、伊勢神宮の式年遷宮）。いずれにせよ、世界文化遺産の登録数だけをみてヨーロッパ文化が抜きんでて高いということはできない。他の地域の文化遺産も、もっと別のかたちで評価されてよい。そうした経緯から、普遍的価値に拘泥しない無形文化遺産の制度ができたという。

かたちないものへのまなざし

無形文化遺産のこうした不思議な性格は、世界遺産の制度に対する反省から生まれたといわれる。世界遺産に登録された案件（とくに文化遺産）を一覧すると、明らかにヨーロッパのもの

のが多く、アフリカやオセアニアのものが少ない。人口比から考えると、アジアのものも少ない。文字記録の流通範囲や、異文化に接する頻度など、いろいろな歴史的要因のちがいが、価値審査の結果のちがいにあらわれたのだろう。建築に関していえば、ヨーロッパではしばしば石を素材とするため、永く残ります。他の地域では、朽ちやすい素材を新陳代謝させながら

価値を認められていない状態から出発しても、ユネスコに認められたとたんに、認知度が高まってその価値は倍増する。こうした無形文化遺産を理解するには、その遺産がたどってきた歴史を詳しく見てみればよい。この新コーナーでは、そのような個別事例の紹介をとおして、文化遺産全般についても理解していただくことを計画している。次号も乞うご期待。



2013年に無形文化遺産に登録された「和食」。一汁三菜はその特徴のひとつ